鳥取市教育センターだより

第３号　令和元年９月１１日発行

〒680-0053
鳥取市寺町１５０番地
TEL 0857-36-6060
FAX 0857-26-3878
E-mail
kyo-center@city.tottori.lg.jp

困難や逆境からしなやかに立ち直る力を育成！

所長　　東田　重高

前期まとめの時期となり、各校では子どもたちの笑顔と元気な姿があふれていることと思います。運動会・修学旅行等、子どもたちが主役となって活躍する行事を通して、それぞれの発達段階に応じて貴重な経験を積むことができるチャンスを迎えます。

さて、８月の中学生オーストラリア派遣事業（鳥取市グローバル人材育成事業）の参加者は、交流活動で現地の学生にしゃんしゃん傘踊り（写真右側）を教えましたが、その場で聞かれたことに自分の言葉や身振りで即座に対応する「即興性」が試されました。困ったことがたくさんあったようですが、各自が相手を意識して笑顔で対応したそうです。また、鳥取市しゃんしゃん傘踊りに、ＡＬＴ２名が意欲的に参加し、貴重な経験ができたことを満足感あふれる笑顔で語ってくれました。合同練習（８回）も含めて、本人にとって難しい日本語の説明を聞いて次々と違う動きをすることは決して容易ではなく、困難に立ち向かう彼らの対応力のすばらしさに感動しました。

子どもにとって、経験を積むこと、困難や苦労に対する向き合い方を知ることがとても重要となります。「経験」について、バーナード・ショー（劇作家）は「人間が賢くなるのは、（単に）経験（すること）によるのではなく、経験に対処する能力に応じてである」と言っていますが、子どもたちが苦労に対する向き合い方を知らないと、同じように苦しんだり悩んだりを繰り返すかもしれません。

そこで、副校長・教頭研修②（8/9 立命館大学　菱田準子教授）で学んだことを紹介します。

「レジリエンス」とは、**「ある状況に対しての反応の仕方を自己コントロールし、困難や逆境からしなやかに立ち直る力」**のこと。人が困難から学び、夢や目標に向かうには、**「レジリエンス」**の中でも**「他者の役に立つ喜びと感謝」「自分の心が喜ぶことをすること」**が重要である。

このことは、教育センターだより第２号（前号）の内容「他者とのつながりで自己有用感アップ」、そして、校長研修②（8/6 日本大学　藤平　敦教授）で学校不適応解消（未然防止）として学んだ「自己有用感の育成」との共通事項でもあると確認できました。子どもや教職員が、**「レジリエンス」**を高めていくことを期待しています。

研修企画係　「コラボでつなげる！コラボで活かす！」

中堅教諭等資質向上研修

鳥取市教職員研修の中核となる研修として、年間６回計画している中堅教諭等資質向上研修は、異なるキャリアステージや職務とのコラボ研修としており、中堅教諭やコラボ対象がいない学校については、原則１名の参加を求めています。コラボ研修後、受講者が研修で学んだことを自身の実践に活かすと同時に、他の教職員と連携して各校の取組に活かすことを期待しています。研修資料や研修のまとめを校内での情報共有に御活用ください。

第１回：１６年目研修とコラボ

＜受講者の声（振り返りシートから）＞

生徒に粘り強くピア・サポートの理念で対応したい。自省を促すカードを全校分すぐに作りたい。（第１回）	学校でアセスを実施しているので、ＳＥＬ－８Ｓの効果的な活用についても紹介したい。（第２回）	学校で特別支援教育の研修会があるので、職員全体にポジティブ行動支援の大切さを伝えたい。（第４回）

第４回：中堅教諭同士で情報交換

また、本年度は、中堅教諭が他校の取組を学ぶことができるように、各研修の振り返りの時間に、中堅教諭同士で保育体験や地域貢献体験、校内研修等の実施状況について情報交換を行い、各校における実践のさらなる充実を図っています。

Welcome to Tottori！（新規ALT着任）

新規ＡＬＴのジョーダン先生（西中）、チェン先生（中ノ郷中）が着任しました。２人ともオーストラリア出身で、日本文化への関心が高く、鳥取の児童生徒との学習をとても楽しみにしています。８月１３日、１４日には、先輩ＡＬＴと中学校での外国語授業やEnglish World キャラバンの活動内容について研修を行いました。児童生徒の英語でのコミュニケーション能力向上に向けて、ＡＬＴを積極的に活用してください。

先輩ＡＬＴとミーティング

研修前半を終えて

今年度の研修も約７割が終了しました。本年度は、「すべての子どもがしあわせになるために　ともに学び続ける教師」をめざす教師像として、教職員研修を企画・運営しています。研修後の振り返りシートには、毎回参加したみなさんの「よし、やるぞ！」が、伝わってくる感想がたくさん書かれています。研修で学んだことを、自校での教職員同士の学び合いや実践に取り入れ、魅力ある学校づくりに活かされることを期待しています。

＜受講者の声（振り返りシートから）＞

- ○グループでの演習が非常に有効であった。職員研修会で行ってみたいと思った。
- ○美保南小学校の実践発表を聞いて、道徳教育の取組を全教職員へどう広めていくべきか、とても参考になった。
- ○研修内容を学校に持ち帰り、職員研修でぜひ危機管理の演習を行いたい。
- ○講師の先生がおっしゃった「設計図を描き、戦略を練り、人材を育てる」ことを実践していきたい。

道徳教育推進教師研修での実践発表

特別支援教育ﾜｰｸｼｮｯﾌﾟ①での演習

副校長・教頭研修②でのグループ演習

特別支援教育係

「学校不適応未然防止に向けて！！　Ｐａｒｔ②」

～適切な実態把握～

長い夏休みが終わり、学校では、前期の締めくくりの時期を迎えています。

さて、子どもたちの表情はいかがでしょうか。前期締めくくりの時期だからこそ、これまでの取組を振り返るとともに、改めて子ども一人一人の変容や実態を丁寧に見取る姿勢を大事にしたいものです。

そのうえで、個に応じた適切な対応を図ることが学校不適応の未然防止になります。

★日頃から、次のような事柄があてはまらないかチェックし、適切な実態把握に努めましょう。

- □授業中発言しなくなったり、集中力がなくなったりする
- □忘れ物や提出物が出せないことが頻繁にある
- □特定の教科がある日に登校を渋ったり、その時間だけ保健室に行きたがったりすることがある
- □授業時間に保健室に行くことや、移動教室に遅れてくることが頻繁にある
- □友だちと遊ばなくなり、一人で過ごすことが多い
- □教職員との接触をさける
- □頭髪・服装に無頓着になる
- □過去に長期欠席があった
- □性格や認知（物事の捉え方・感じ方）、行動に特性がある

※その他に、転居や家族の転職等、家庭内で何らかの生活の変化があった場合も注意が必要です。

しかし、そんな中でも欠席し始めたら・・・。

＜欠席し始めたときの対応＞

子どもの欠席に敏感になりましょう。たとえ欠席理由が病気や家の都合であっても、何度か繰り返したらそれは行き渋りや不登校の始まりかもしれません。対応の遅れを招かないよう、早めの判断と行動を心がけましょう。そのためにも教職員がチームとして組織的に取り組むこと、子どもについて多面的な視点で情報収集をするということを意識しましょう。

児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握して取り組むという特別支援教育の視点から考える

特別支援教育ステップアップ研修①　みんなの「自立活動」

講師　中尾　繁樹　氏（関西国際大学　教授）より

※チームとして不登校や行き渋りになるリスクや可能性のあることが想定できること、未然防止のためにすべき配慮が共有できることが必要です。

＜学校として配慮すべきポイント＞

☆兄弟に不登校経験がある場合、初めて欠席した時

→欠席が続くリスクをふまえ、休んだ理由や背景を探り、意図的なかかわりをもつ。

☆欠席日数が１４日あった次年度に欠席日数が０日であった年度

→なぜ欠席が０日となったのか、担任のより良いかかわりがどのようなものだったのか、本人が安心できた要因が何だったのか、明確にし、次の担任へ引き継ぐ。

☆出席日数が０日となってしまった時

→家庭訪問しても出てこないことが考えられます。本人が家から外に出てきたところで話をするといったことを考える。